

公共図書館でなぜ健康情報サービスを提供するのか

山重 壮一
香美市立図書館

公共図書館で「健康情報サービス」を提供する理由はだいたい3つある。

第一に、病気になったら医者まかせという時代ではなく、患者自身や家族などまわりの人間も病気について学習することが必要になったからである。第二には、超高齢社会となり、変な言い方だが、病気がより身近になったこと、また、逆に医療の進歩により、生活習慣が原因となる病気が大きなウエイトを占めるものとなったので、健康な生活習慣とはどのようなものか学ぶ必要が誰にでも出来たということである。さらに、第三として、このような状況の変化で、医療や健康増進になんらかの形で関わる人たちの裾野が広がり、このような人たちの知識や技術を深める情報の提供も必要となってきたからである。

公共図書館の蔵書構成は、一般的には、小説、家事、児童書が多く、その他の分野については、入門・教養レベルに留まることが少なくない。年間に出版される図書は7万から8万タイトルであり、すべてを購入すると2億円近くかかるので、資料費の少ない図書館では十分に購入できないという事情もある。

特に、医学書については、最も後回しにされる分野と言っても過言ではなかった。公共図書館の職員は、いわゆる「文系」の人が多く、いわゆる「理系」が得意でないということもあるが、そもそも、難しい医学書を読む人というのは利用者にはほとんどいない状況だった。

すると、公共図書館の医学の棚はどのようなことになるかという、意図せず、結果的に、怪しい本ばかりになってしまった。例えば、マスメディアで宣伝される、医者には行かない方がいいとか、これを食べれば健康になるというたぐいである。あるいは、もっと「スピリチュアル」なものもある。こういうのを見て、公共図書館は、なぜこのようなものを買うのかという話になるのだが、利用者からリクエストが来るのである。

公共図書館は、利用者のリクエストになるべく応えようとする。それは、ある意味、内容に関わらずである。第二次世界大戦中に検閲に協力していた公共図書館は、強い反省があり、「図書館の自由に関する宣言」を行い、利用者の読む自由を保障することを謳っているからである。しかし、事前には積極的に医学書を購入しないで、リクエストには積極的に応えようとすると、怪しい本ばかりが医学書の棚に並ぶ結果になる。

「図書館の自由」は、民主主義社会の主権者である住民の学習権や知る権利を保障する図書館にとって欠かせないが、正確な医療や健康に関する知識を得られないのであれば、それは、学習権や知る権利を保障しているとは言えない。そこで、公共図書館でも正面から、医療・健康情報の提供に積極的に取り組む必要が出て来た。そしてまた、現在の日本の政治・行政の課題が経済や産業の復興と同時に、国民の健康長寿の実現であることから、役に立つ図書館としてぜひともやらなければならないことになった。むろん、公共図書館職員は医療関係の専門家ではないので、専門機関と連携・協力することも必要となった。今後は専門性の違いを越えて、お互いに積極的に交流を深める必要があると言える。